

## 俳諧の風情

田中俊一

日本文藝理論に於いて屢、用ゐられてゐる風情といふ言葉が何を意味してゐるかは、歌論、能樂論、俳論の統一的  
理解と相俟つて、日本文藝理論を構成する重要な問題であるが、茲では特に俳論に表はれた風情に就いて論じてみた  
らう。

俳論に於て最も端的に風情を論じてゐるのは、支考の「俳諧十論」であらう。其の「第五姿情ノ論」に、

「そも俳諧の風姿、風情とは、其體に古今の差別あれば也。古風は耳に其情を聞て、言語の上の姿をとらへず。  
今様は目に其姿を見て、言語の外の情を含む。しかれば古は情のみにして今は姿の論としるべし。物に情あらば姿  
なからんや。」

とあるのは、俳諧性の把握に於ける二つの觀點を示してゐるのであつて、本質直観に基く對象把握は之が形象化を完  
全ならしめるといふ見解と、具象化の完全さは自ら對象の本質を把握せしめ得るといふ見解とに分けられる。支考は  
特に後者に俳諧的表現の重點を置いて居り、

「其情は其姿にしたがひて、あれどもなきがごとくなれば、今は姿の論といふ也。」（俳諧十論）

と迄述べてゐる。彼によれば表現とは具象化であり、風姿をととのへることに盡きるのであるが、風姿のみあつて風情がないといふのは、

「辨舌口ずの人赤裸にて玄關にかしこまりたらんは、何の使者かつとまり侍らん。綾羅錦繡を身にまとひたる人の耳うとく舌みじかき」（續五論）

にも例へられると言つてゐるから、彼の所謂風姿をととのへることは當然風情の適確な把握を前提としてゐなければならぬ。従つて彼の風情、風姿の論は俳諧の表現に於ける二元論的見解でありながら、その實は全く統一され得べき一の見地に立つてゐるのであつて、茲に風情の何たるかを究明する意義が存するのである。

今大言海に依つて風情の項を繙いてみると、その意味は四つに分類されてゐて、

一、ケシキ。ケハヒ。オモムキ。アデハヒ。趣致。

二、サマ。ヤウス。フウ。

三、ナドヤウノモノ

四、ナドヤウノヤカラ。タグヒ。（卑メテ云フ）

となつてゐる。一の例としては、

「跡ノ白波ニ身ヲヨスル朝ニハ、岡ノ屋ニ行ギカフ船ヲナガメテ、滿沙彌ガ風情ヲスミ」（方丈記）

「口傳ニ曰ク、音曲、舞、働、振、風情、コレマタ同ジ心ナリ」（花傳書別紙口傳）

を擧げてゐるが、之に類した意味の風情は、俳論では、

「猪の寝に行かたや明の月

此氣しき面白さに自讃し、翁へ見せ申候所、我に翁、暫く物をも不被申候ゆゑ、拙者心に猪の山へかよふ氣しきしられざるやと、重而其風情を咄し候へば、(中略)すべて古哥などをとるには、一しほ風情も姿もせめ上て申度事ニ候。」(去來文)

に於いて見られる。此の様な場合の風情はそれ自體の分析的記述でもなければ、説明でもなく、概念的に一種の趣でもいふべきものを表示してゐるに過ぎない。二の例としての、

「似ルヲ友トカヤノ風情ニテ、忠盛ノ好イタリケレバ、此女房モ優ナリケリ」(平家物語)

「地ニヒレフシ、穴ヘモ入リタキ風情ナリ」(源氏烏帽子折)

の場合は、

「わりなしやみどり子に扇貸風情

此句を聞て竿秋曰、(中略)おもふに移竹はわざと一句をくた／＼しく云下して、風情といふ字に句をもたせたるならんかし。」(新雜談集)

に於いて見られる。此の例は句中に詠み込まれた風情といふ語の表現効果を論じてゐるばかりであつて、風情の意義を論じたものではなく、明らかに既に存してゐた二の意味としての風情を茲に引いて句を説明したものである。三の例としての、

「長持、云云、黄金、巻物、染物ふぜいの物ヲ入レテ奉ラル」(平家物語)

「風流ノ破籠ヤウノ物、懸ニ營ミ出デテ箱風ぜいの物ニシタタメ入レテ、雙ノ岡ノ便リヨキ所ニ埋ミオキテ」(徒

然草)

とか或は、四の例としての

「當時禪家并時衆風情ノ輩、坊中ノ具足ヲ令ニ結構」(海人藻芥)

「下女ふぜいナドト陳ズル若旦那」(柳樽)

に至つては、その用例を俳論に見出すことすら困難である。即ち俳論に言ふ風情は主として一の意味に用ゐられた場合が殆んどであつて、然も後述の如くそれが漠然とした「ケシキ」とか「オモムキ」とか「趣致」とかを指すばかりでなく、或特定の「アデハヒ」を意味することが理解されるのである。そして「續五論」に於ける、

「田家・山莊の諺には、田家・山莊のおもはるゝに、俵あむ片手には食の火をさしくべ、柴賣の戻に鍋ぶたあつらへたるなど、をの／＼その場をさるまじき俳諧の風情也。」

の様に、その風情は俳諧的なものを指標するものでなければならぬのである。然らば俳諧性に於ける風情は如何にといふと、

「はいかい己が家にありながら、天地四海をかけめぐり、春夏秋冬の變化にしたがひ、月はなの風情にわたるものなれば、百句は百句に變化すべき事也。」(二十五箇條)

に見られる通り、表現の變化の中にも統一的に見出し得る俳諧的對象の特性とでもいふべきものであつて、俳諧性を規定する本質的要素と考へられる。然るに之を表現上の形式的要素として論じた場合も存するのである。つまり、

「花實集」に於ける

「鶯の舌にのせてや花の露

半 残

此句のするやといはゞ風情あらじ」

の如きは表現上の言語的技巧に就いて言はれたものであり、「二十五箇條」の

「脇は亭主の位なれば、己の心を負ても發句に云殘したる草木・山川の一字・二字の風情を加へて、客の餘情をつくすべきなり。」

も同じく表現技巧に關するものとして述べてゐるのではあるが、文藝的表現が言語的技巧と密接な關係を持つてゐることは餘りにも當然である爲に、用字法の如何によつて風情の有無が生ずるといふ結論も出て來たのである。然し風情が單なる技巧上の問題として形式的に論じられるべきでない事は、「俳諧寂菜」に於ける「作に進む事」「見立句の事」の條で、趣向の斬新さや面白が風情を形成するのでないと述べてゐるのに依つても明白であり、又「去來抄」でも風情の有無と言語的技巧に基く句の優劣とは之を別個に考へてゐる、

「うぐひすの海向てなく須磨の浦

卯七

丈草曰、のといひて風情は侍れど、たしかにもといはんかたまさるべし」

と述べてゐるのは、風情のある句が劣つてゐるといふ事を言はんとしてゐるのでは決してない。例證を引く迄もなく「風情を盡す」ことは俳諧的表現の理想なのであるが、句の優劣は相對的な問題で、之を風情の論と同一視點に於いて考へること自體が誤りなのである。従つて表現技巧上の問題として風情が論ぜられるのではないとすれば、それは表現對象に關するものでなければならぬ。ところが、

「駒買に出迎ふ野邊の芒哉

野明

去來曰、駒買に人の出迎ふたる野邊の薄にや、又直に薄の風情にや」(花實集)

によれば、風情とは客觀事象が具へてゐる一種の美的性質を指してゐるやうである。この場合には自然科學的實在としての芒が茲に表現しようとする美的對象の客觀的性質を最も明確に具備してゐるといふ意味になる。更に

「唯に春夏の都を出て秋白川に至り、長途に日數を経ると云一片の事に不寄、一首は秋風の吹わたる白川の風情に驚き、一首は紅葉ちりしく白川の氣色を述べられたり。然共此二ツの風情に衣裝せざらんには聊詠じ給ふ。」（旅寢論）

に於ける風情は文藝的對象となり得る客觀事象の總稱であつて、客觀事象の別稱若しくはその抽象化された概念として理解される。だが次の例に依れば、必ずしも客觀事象自體を風情とは呼んでゐない。

「狩野家の布袋、福祿壽も、常は見あきたる風情もあれ共、初春のあしたには、いとめでたきもてあそびならん。」（篇突）

右では客觀的事物に依つて生ぜしめられた主觀的狀態を指してゐる。つまり美感の對象となる客觀事象を目して風情ありといふ事は、その事象が風情といふ一つの性質を具備してゐるのではなく、それが美的對象把握の契機としての條件を具へてゐることが認識された場合に言はれるのである。か様に客觀事象自體と、それに依つて起される主觀的狀態との混同を來すが如き曖昧さは、天明時代に至つて漸く意識され、「新雜談集」や「附合てびき蔓」では前者を「景情<sup>けいじやう</sup>」といふ言葉で以て表現し、風情との區別を明確に立ててゐる。さて主觀的狀態としての風情は、

「是を城門にうつして見れば、其風情あはれに物凄き事はかりなし。」（去來抄）

の様に「あはれに物凄き」性質を以て具象化される場合もあり、

「大寒に入夜の月のすさまじく、といへる風情ならん。」（篇突）

といふ表はれ方もあつて、風情は諸の美的様相の統合された或種の概念に名付けられたものであるとも言ひ得る。即ち表現上の技巧に於いて風情が云々されるのは、その作品の言語的表現が意味上の内容を通して鑑賞者の志向する觀念的美的對象を表示してゐるか否かが問題とされる場合であつて、一語々々の言語がそのまゝ直ちに文藝的對象を表現するといふ意味ではなく、文藝的表現の特質としての言語的機能の操作が對象の表出作用に必要であることを意味してゐるのである。又客觀事象の美的性質に就いて風情が云々されるのは、その作品が鑑賞者に對して表示するところの文藝的實在が或種の心理的作用を伴つて現實にあるものと考へられる場合を指すのである。そして主觀の狀態としての風情は、種々の美的様相を生ぜしめる客觀事象の普遍的な在り方を言ふと同時に、其等の美的様相を統合するところの直觀によつて構成せられた概念であるといへよう。

以上の様な風情の解釋に對する裏付けとして再び支考の姿情論を借りるならば、

「有情のものはさらにいはず。無情の草木、瓦石より道具、表色包力いたるまで、おのれ／＼が本情をそなへて尤人情にかはるべからず。其本情にいたらぬ人は、月華に對して月はなをしらず、道具持てもまたぬ人に似たるべし。」

（續五論）

とあり、物の本情を知ることについて始めて月華を知り得るとは、物象の形體がその全てではないといふ事を言はんが爲であつて、本情とは萬象の本質を言ふのであるが、本質と形體とに就いて彼は、

「そも／＼姿情の先後を論ぜば、人は天地の次に生じたれど、仰ぎて天といひ俯して地といふより、三才の姿はさだまりぬ。天地は人のつけたる名なれば、人を姿のはじめにして、月星をさして天の姿といひ、草木をさして地の姿といへる占文の祕訣も爰ならん。しからば姿は先にして、情は後なりと決すべし。」（俳諧十論）

と述べて、姿があつてこそ情が之に伴ふと言ふ。これはつまり姿なくしては情の表現が不可能なることをいふのである。本質の把握は必ず具象化を伴ひ、具體的形象なきものに本質把握の實證を求めることは出来ないといふのである。殊に文藝に於て具象化を考慮の外に置くことは考へられない。如何に文藝的對象の適確な把握をなし得ても、具象化が無ければそれは表現以前の問題として扱はれねばならない。藝術の存立を表現に於いて認める限り、表現作用自體と、表現せられた世界とに藝術としての意義と價值とを認識するのである。而してそれは同時に何を表現すべきかといふ對象の問題に迄關聯を持たねばならなくなる。だからこそ、

「都て月花は風雅の道具なれば」(二十五箇條)

の言も出るものであり、

「まして月雪花ほとゝぎすの風雅の情をうつすにも云々」(俳諧十論)

とも言はれるのであつて、一切の萬象が悉く單なる素材として用ゐられ、表現するものは月であつて月でなく、雪であつて雪でない、而も花でなくして花であるといふ一見矛盾した論法が藝術の世界に公然と行はれたのである。茲に表現上の對象と素材的な對象との融合、分離が行はれたのであり、それを統括する言葉として風情が用ゐられたのである。従つて或時は、

「おく山の鹿の風情」(旅寢論)

といひ、或時は句を評して

「この句は風情あり」(旅寢論)

といふ様な言ひ方がされ、又



「風情といひ來るを、支考は風姿、風情とふたつにわけて教らるゝ、尤とし安し。」（花實集）

と風姿も風情も本來は共に風情に統一されるべき概念であることを明示してゐる。物象の本質と、その本質の適確な形象とを以て風情と言ひ來つたものを、形象作用を論ずるのに風姿の説が行はれたとすると、風情は本情と同義で本質論のために用ゐられねばならなかつたのである。そして本質論と表現論とに二様に用ゐられた風情が藝術の世界を代表する言葉となり、俗には「風情を解する」とか「風情を解せぬ人」とかいふ用法逆行はれるに至つた。然しそれは、

「風情わづかに動きぬれば理となり、その理きはまりて後を屈といふ。」（續五論）

の如く、理に依る對象把握であつてはならない。「風情わづかに動く」とは既成概念によつて對象把握に理由を附せんとするところに成立する表現の仕方である。勿論かうした表現が對象の本質に觸れるものでないことは明らかである。それは「風月の情」（葛の松原）であり「風雅の情」（俳諧十論）でもあつて、藝術的素地の上に於いてのみ存在する情緒の在り方であると同時に、直観によつて構成せられた一種の概念でもある。

以上を要するに風情は客觀事象によつて生ぜしめられた主觀の狀態の齎らす或種の美的様相及び客觀事象の具備してゐる或種の美的性質の統合概念であると共に、表現せられた抽象的實在としての或種の美的對象を稱するのであつて、特にそれが俳諧的なもの——茶道、能樂、和歌等の一部にも見出し得るところのもの——によつて統一される場合に、さう呼ぶのであると思はれる。俳論から割り出した結論としては多分に早計に過ぎる嫌ひがあるが、歌論、能樂論をも網羅する時、一層風情の意義が擴大され深められるであらうことは想像に難くない。

古枯やつくと取るゝ鐘の聲  
松原へ人吹入るゝ枯野かな

人吹入るゝといふ言葉を遣はんと思ひよりし成べし。作に進む時は其作にのみ遣はれて、餘情も風情も通情もなし。是等の案じ方は邪路に落入たる成べし。

#### 見立句の事

曲水や岩もみつ組五つくみ

鴛鴦や岩を屏風に立ながら

かゝる所に遊ぶもの、何をもて餘情になし何をもて風情となす。夢／＼見立句の案じ方有べからず。是等の趣きよりさま／＼の邪路に落入る也。(俳諧寂葉)

(2)

又云、有用にして無用無用にして有用の案じ方専らたるべし。是等の趣を能く辨へて句々風情を盡すべし。(俳諧寂葉)

(3)

もとより發句にいひ残せし所の山川、艸木、鳥獸の類ひをもて、發句の景情を増を專要とす。(附合てびき蔓)

梅が香に狂ふがごとし月の雲 几董

この句、只題のおもてによりて、餘寒の風情を述待りしかば、さのみ人の賞せしにもあらざりしを、ひとりいせの櫻其は一句の景情感淺からずなどいへりしか。(新雜談集)

名所の句に無季をゆるすなどいへるも、敢て作例に隨ふとしもあらねど、其場に至りて景情の實に感動せるゆへならんかし。(新雜談集)